

夏・商（殷）両王朝の都について の文献学－考古学検証

The Philological and Archaeological Study of Xia and Shang (Yin) Dynasty's Capitals

王 妙 発
Wang, Miaofa

ABSTRACT

While the history of Shang(Yin) Dynasty is already well-documented, the history of the earlier Xia Dynasty is still somewhat of a legend. According to “Gu ben zhu shu ji nian” and other documents, there were a total of 28 capital sites during the period of the two dynasties, which indicates how frequently the capital moved. This paper discusses how many capitals can be proved by archaeological work over the past century, and concludes that only one archaeological “city” matches by name one of the 28 capitals in documents although some others might be capital sites in terms of size and other characteristics. This proven archaeological “city” actually includes two archaeological sites- Huanbei Shang cheng and Yin xu. This paper agrees with the points that Huanbei Shang cheng is the site of a capital, and that so-called Yin xu is the tomb area of the royal family in the Shang (Yin) dynasty.

（一）文献所見の夏・商（殷）二つ王朝の「都」

夏・商（「殷」とも称する）両王朝の帝王の家系および住む都（居場所）について、文献によって記載は多少違いがある。ここに『古本竹書紀年』の記載によって時代順に排列してみた（方詩銘・王修齡：『古本竹書紀年輯証』による⁽¹⁾）。

夏代（夏王朝）：

禹都陽城（禹の都は陽城である）。

太康居斟尋（「羿亦居之」）（太康は斟尋に住む「羿も同じところに住んだ」）。

帝相處商丘（帝相は商丘に居る、「商丘」が「帝丘」で表すこともある）。

相居斟灌（相は斟灌に住む）。

帝寧（杼）居原，自原遷於老丘（帝寧（杼）は原に住んで，原から老丘に移す）。

胤甲居西河（胤甲は西河に住む）。

桀居斟尋（「太康居斟尋，羿亦居之，桀又居之」）（桀は斟尋に住む「太康は斟尋に住んで，羿もまた住んで，桀もまた住んだ」）。

商代（商王朝）：

外丙勝居亳（外丙勝は亳に住む）。

仲壬居亳（仲壬は亳に住む）。

沃丁絢居亳（沃丁絢は亳に住む）。

小庚辯居亳（小庚辯は亳に住む）。

小甲高居亳（小甲高は亳に住む）。

雍己（伾）居亳（雍己（伾）は亳に住む）。

仲丁自亳遷於囂（仲丁は亳から囂に移した。「囂」は「隰」とも発音し、「音転」である。）

外壬居囂（外壬は囂に住む）。

河亶甲自囂遷於相（河亶甲は囂から相に移す）。

祖乙滕居庇（祖乙滕は庇に住む）。

帝開甲踰居庇（帝開甲は庇に移す）。

祖丁居庇（祖丁は庇に住む）。

南庚更自庇遷於奄（南庚は庇から奄に移す）。

陽甲居奄（陽甲は奄に住む）。

盤庚旬自奄遷於北蒙曰殷（盤庚旬は奄から北蒙に移し、殷と称す）。

『竹書紀年』以外の文献にも、夏・商（二族あるいは二王朝）の「王都」あるいは「王」の居住地に関する記載が幾つかある。

夏代（夏王朝）：

有夏の居：「自雒汭延於伊汭，居易無固，其有夏之居。我南望過於三涂，北望過於岳鄙，顧瞻過於有河，宛瞻延於伊雒，無遠天室。」（洛河から伊河に移し，居場所は不定で，それは『有夏の居』である。我々は南へ『三涂』を眺め，北へ『岳鄙』を眺め，遠く眺めて黄河を越える。周りは伊雒が延々して，天室まではもう遠くない。）（『逸周書』度邑解）

「禹受封為夏伯，在豫州外方之南，今河南陽翟是也。」（禹は『夏伯』として受封され，（場所は）豫州の外方の南にあり，今の河南陽翟である）（『史記』夏本記・正義（『帝王世紀』を引用した文）。

「夏居河南，初在陽城，後居陽翟。」（夏は河南に位置していた。初め（の都）は陽城で，その後陽翟に移った）（『史記』周本紀集解に引く徐広の説）。

（陽翟）「夏禹国」（陽翟は夏禹の都であった）（『漢書』地理志潁川郡陽翟県自註）。

「陽翟県本夏禹所都」（陽翟県は元々夏禹の都）（『元和郡県誌』五卷，河南府陽翟条注）。

その他の禹の都（居場所）：

「夏禹……又都平陽，或在安邑，或在晋陽。」（夏禹……また平陽を都とし，また安邑及び晋陽も都をした）（『史記』封禪書・正義に引く『世本』）。

「安邑禹都也」（安邑は禹の都）（『水経』陳水の注）。

相は帝丘に住む：

「相，夏后啓之孫，居帝丘。」（相は夏后啓の孫であり，帝丘に住む）（『左伝』

僖公三十一年・杜注)。

「相徙帝丘」(相は帝丘に移った)(『通鑑地理通釈』巻四に引く『帝王世紀』)。

桀の都(居場所)：

「桀都安邑, 相傳為然。」(桀が安邑を都としたと、伝えられてきた)(『尚書』商書序・孔疏)。

「夏桀之國, 左天門之陰, 而右天奚谷之陽, 廬寧在其北, 伊洛出其南。」(夏桀の國は、左が天門の陰で、右が奚谷の陽である。廬寧がその北にあり、伊洛(川)がその南にある)(『戦国策』魏策一)。

「夏桀之居, 左河濟, 右泰華, 伊闕在其南, 羊腸在其北。」(夏桀の住むところは、左に黄河があり、右に華山がある。伊闕がその南にあり、羊腸がその北にある)(『史記』孫子呉起列伝)。

商代(商王朝)：

湯は亳に住む。湯は商朝初代の王で、亳に居住していたという文献記録が多い。

「湯居亳, 與葛為隣」(湯は亳に住んで、葛に隣り合was) (『孟子』滕文公下)。

「古者, 湯封於亳, 絶長繼短, 方地百里」(昔、湯は亳に受封され、(国を)精力的に治めて、範囲は百里に達した)(『墨子』非命篇上)。

「湯居亳, 武王居鄩。」(湯は亳に住む、武王は鄩に住む。)(『荀子』正論篇)。

「湯以亳, 武王以鄩, 皆百里之地也」(湯は亳により、武王は鄩によって、共に百里の範囲に達した)(『荀子』王霸篇)。

「客説春申君曰：『湯以亳, 武王以鄩。』」(客が春申君に言う：「湯は亳により、武王は鄩によった」)(『戦国策』楚策四)。

「湯以亳, 七十里。」(湯は亳によって、七十里になった)(『淮南子』泰族訓)。

「湯始居亳, 從先王居。」(湯は最初亳に住んで、先王の旧地だったため)(『尚書』商書序、『史記』殷本紀)。

「湯放桀而復薄」(「亳」と同じ、「古音通仮」——古代の語音が仮借されて

通用する。以下同じ）、三千諸侯大会。」（湯は桀を追放して、薄（亳）に戻った。（その後）三千諸侯の大会に臨んだ）（『逸周書』殷祝解）。

「湯奉桀衆以克有夏，属諸侯於薄。」（湯が桀の（反乱した）部下を受け引いて、「夏」を滅亡させ。薄で諸侯（の会合）に臨んだ）（『墨子』非攻篇下）。
「古者湯以薄，武王以鄘，皆百里之地也。」（昔，湯は薄により，武王は鄘によって，共に百里の地を持つ）（『荀子』議兵篇）。

「夫湯以七十里之薄，兼桀之天下。」（湯は七十里の薄で，桀の天下を兼併した）（『管子』輕重篇甲）。

湯は賛茅に住む：

「湯封賛茅」（湯が賛茅に受封された）（『商君書』賞刑篇）。

文献では商（族？王朝？）が夏王朝を滅ぼす前に都（居場所）を八回も移したと記している。商の湯王が亳に移る前の七回は次の通りである（王国維『観堂集林』巻12「説自契至於成湯八遷」による）。

契居蕃（契は蕃に住む）。

昭明居砥石（昭明は砥石に住む）。

昭明自砥石遷於商（昭明は砥石から商に移す）。

相土遷商丘（相土は商丘に移す）。

相土遷居東都泰山下，後復歸商丘（相土は東都泰山の下に引っ越して，もう一度商丘に戻る）。

商侯遷於殷（商侯は殷に移す）。

殷侯復歸於商丘（殷侯はもう一度商丘に戻る）。

商が夏を滅ぼした後について、『竹書紀年』と異なる記載がまだ他にいくつかある。

「祖乙遷於邢」（祖乙が邢に移す）（『史記』殷本紀）。

「祖乙圯於耿」（祖乙は耿に葬る）（『書』商書序）。

上は各文献に記録されている夏・商二王朝の「王都」であって、全部で28ヶ所（場所）ある。相対年代の順で次のように排列した。

夏代（夏王朝）：

有夏之居——陽城（陽翟・平陽・安邑・晋陽）——斟尋——商丘——斟灌——原——老丘——西河——夏墟

商代（商王朝）：

蕃——砥石——商——商丘——泰山下——殷（贊茅）——亳——囂（「隰」）——相——庇（邢・耿）——奄——殷（「北蒙」）

『古本竹書紀年』には次のような記載がある。

「自禹至於桀十七世，有王與無王，用歲四百七十一年。」（禹から桀まで十七世あり，王か王でないかで，全部で四百七十一年である）。

「湯滅夏以至於受（紂），二十九王，用歲四百九十六年。」（湯が夏を滅びてから受（紂）まで，二十九王があつて，全部で四百九十六年である）。

上記の両者を合わせて九百六十七年となる。禹の前の年代をさらに加えると，全部で千年余りである。絶対年代はおおむね前21世紀から前11世紀頃までであり，年代上，後で言及する発掘されている一連の遺跡のC¹⁴年代と大体相当する。

全体的に，夏・商二王朝の「王都」は移転の頻度がきわめて高く，「不長其邑（同じところに長く住まない）」との特徴がある。しかしこのように何度も都を移す本当の原因について，学界では意見が一致していない⁽²⁾。ただこの現象は，筆者がこの時代より前の先史時代の竜山期（文献資料がない時期）の集落に対する研究結果と共通する所がある。

竜山期では、小規模な集落と「遺物包含層」の薄い集落が急速に増える現象がすでに見られた。増加の原因は竜山期集落の使用年限が短縮し、移転頻度が増したためだと、筆者は考える。この現象は竜山後期までなお続いていたのも分かっている⁽³⁾。

上記の文献記録から更に、小型集落だけでなく、大規模集落であるはずの「王都」も度々「都をあげて移す」（あるいは「部族をあげて移す」）ことを行っていたことが分かる。その原因として、自然災害、戦争、政治混乱、土地の地力の減少などがあげられる。またある種の理念上（宗教上）の原因も挙げることができるが、この理念的原因はあくまでも派生した原因であると考えられる。

上の夏・商の二つ王朝（民族）の「王都」の移転状況を見ると、大体この時期にこの二つの民族の活動した地域の範囲が分かるようになった。しかし、これらの文献に記載されている「王都」と考古発見されている遺跡との関連（つながり）は、商王朝の最後の都の殷（北蒙）だけが今日の河南省安陽市の殷墟（小屯村）だと一般的に認められているが、そのほかの「王都」については、考古発見されている大規模な集落遺跡にどのように繋げるかは、まだ一般的な認識（定説）はないのである。

ただし、たとえ安陽市の殷墟（小屯村）は商王朝の最後の都の殷（北蒙）だという「定説」に対しても疑いをいだく者がいて、小屯村の殷墟は盤庚が移ってきた地でなく、武丁が移ってきた地であると主張した。その代わりに盤庚の移した殷（北蒙）は別のところであって、しかもその別の地は河南省偃師県にある尸郷溝商城であるという。更にこの殷墟がもともと都ではなく、ただの王陵及び祭祀を営むところだという説もある⁽⁴⁾⁽⁵⁾。

残りの数多い「王都」については、いろんな推測があったが、学界では今まで発掘された考古遺跡には、「王都」に対応できるものがないとする。しかしこの二つの民族（王朝）の分布・活動した地域については、すでに文献記載によって大体正確な範囲が分かっている。

鄒衡氏の考証によると、夏人の活動範囲は河南省の北部及び西部、山西省の

東部及び西南部、陝西省の北部、山東省の西部、つまり黄河の中流と下流地区のほぼ全域であるという。その中の幾つかの場所での活動は活発で、特に河南省西部では最も活発であった。商人の活動範囲は、湯王以前は、大体河北省西南部、河南省の北部であり、湯王の時から「黄河を越え」、次第に河南省の中部及び西部に勢力が及んだのである。⁽⁶⁾ 鄒衡氏のこの説は夏人の分布範囲に関してはほぼ間違いないと思うが、商人の分布範囲については少し問題があると思う。湯王の前には商人がすでに蕃・商丘・泰山下などの地に住んでいたが、そのいずれも黄河の南に位置している。⁽⁷⁾ 前にも言及したことがあるが、この時期の黄河中流・上流一帯は、周族（先周）の活動地区であった。周知のように、古公亶父が移った周原は、陝西省岐山の一帯に位置する。しかしこれ以前、先周民族の行き来の経緯は、文献からも考古発見からも明らかになっていない。考古発見の文化様相から見れば、先周族の活動していた地域は大体今の陝西省、甘粛省の涇渭地区で、次第に東へ移って、最後に今の陝西省長安県の灃西地方に到着して、「宗周」と称するのである。東方の夏・商との二族に較べると、後竜山期の時には周族はまだ比較的立ち後れて、文化的伝統も一致しないことがため、この時期の大規模の集落及び城壁で囲まれた集落は周族の活動地区にはほとんど分布していないのも事実である。

（二）考古学発見と文献との対照

文献上の記載から、夏と商（殷）の二王朝は都（王都）の移転率がきわめて高かったと分かる。黄河流域で発見されている幾つかのこの時期の大規模な集落遺跡には、記載されている王都に比定できるものが入っているに違いないだろう。特に二里头遺跡⁽⁸⁾、鄭州商城⁽⁹⁾、尸鄉溝商城⁽¹⁰⁾、洹北商城⁽¹¹⁾と殷墟⁽¹²⁾という五ヶ所（四ヶ所？）がそうである。しかし、これらの大規模な集落遺跡の実際状況から見ると、すべて計画的に大量の物資、財力を費やして建築して、また長時間にわたって経営したようである。建築の当初は、年月を経てから廃止する予定がないようである。しかし実際の状況は、これらの都（集落）は、建

築（使用）された年代が先—後の順があったのである。すなわち文献に記載されている王都のよく移転することが考古発見の間にはある程度で一致したのである。計画的に建設した都が次から次への移転する現象はどのように解釈・理解したらよいだろうか。つまり、このような大規模な集落（都市？）を次々と建て、またこのように頻繁に移転した本当の原因は何であろうか。

商代からすでに「別都」を設ける習慣があつて、例えば尸郷溝は「太甲の桐官」だというのが一つの説である。⁽¹³⁾もしこの説が成立できれば、文献上記載のある王が「〇〇に居する（住む）」ことは、つまり新しい都を作ったことだと理解してもいいだろう。つまり、歴代の商王は頻繁に「別都」を増やし続けていたのである。もちろんいくつか古い都の淘汰・廃棄もあるので、各都（集落）の年代も自然に前後してしまうのである。これはある程度、考古発掘で発見された各遺跡の年代が前後する事実にも合っている。しかし、これもまだ推測にとどまることで、決して十分な証拠があるとは言えないのが事実である。

数ヶ所の大規模な集落が発見された当初、どのようにして文献記載に対照するか⁽¹³⁾の論議が起き、この論議は今なお行われている。では、発見された年代順に述べてみよう。

最初に発見されたのは河南省安陽市小屯村にある殷墟である。『竹書紀年』に「自盤庚遷殷……二百七十三年更不徙都」（盤庚が殷に遷してから……二百七十三年を経ても都を遷してない）との記載があるため、普通、ここは盤庚が都を移してきた殷（北蒙）であると思われる。王国維の論述は最も代表的で詳しい。「殷は洹水南の殷墟だ」、「亀甲と骨の出土は皆この地でのことで、つまり（ここは）盤庚が遷来してきた殷の旧都だ⁽¹⁴⁾」という。この説は圧倒的に多くの人に受け入れられている。しかし丁山は『『竹書紀年』では盤庚の後は『更に移さない』と記されてはいるが、実のところそうではなかった』と主張する。更に、『『国語』 楚語上では、白公張が楚靈王に対し、『昔殷武能聳其德至於神明以入於河自河俎亳（昔、殷武丁はその徳にそびえることができて、神明となり、

河を渡って、河から亳に遷す』と言ったことが記載されている。……今の小屯村の出土した文物は、武丁の『河から亳に遷す』ことが実は北蒙から、黄河を渡って、小屯村（殷墟）に定住することに裏付けている⁽¹⁵⁾』という。つまり殷墟は実に武丁の移した「亳」であるとの説を展開した。この説は影響力があまりなく、殆んど忘れられているが、しかしここ十数年、商代考古を研究する数人の学者はこの説を再提起し、⁽¹⁶⁾「盤庚遷殷」説を疑った。その中で彭金章・曉田の「殷墟為武丁以来殷之旧都説」という論文は最も詳しい⁽¹⁷⁾。この説に主に三つの理由がある。

（１）考古遺物上の「殷墟文化」は全部で四期に分けられて、武丁は第二期に属する（これが一般的に認められている）。武丁以前、つまり第一期文化のとき、殷族の人がここに居住するが、ここは王都ではなかった。また、殷族の人は人数が少なく、活動範囲も小さい。「今まで第一期に属する大規模な版築建物及び王陵が発見されていない」上に、また「大規模な宮殿の建設及び商王陵墓の建造はみんな第二期からのことである」という。

（２）殷墟で出土した甲骨文字が『甲骨文合集』に収録されていて 41,956 枚に達するが、全てが歴代商王のもので、盤庚、小辛、小乙時期に相当する甲骨文は今まで発見されたことがない。

（３）引用される『竹書紀年』が言う」というのは間違いである。『史記』殷本紀・正義にある引用文はもともと李泰の『括地誌』にあるもので、『竹書紀年』の内容を包括したのである。

この上、論文はまた「盤庚が一体どこへ移ってしまったのか」との問題を提起し、亳に移したと主張し、この亳は即ち尸郷溝商城であるとした。その理由としては『史記』殷本紀に盤庚が、「復居成湯之放居、……治亳，行湯之政（もう一度成湯の旧居に居住し（移し）、……亳に拠点を置き、湯の政治を行う）」との言葉があるからだという。

この説は説得力がないわけではないが、必ずしも定説でもないと言わざるを得ないだろう。

その後、秦文生が『殷墟非殷都考』で、殷墟が決して都ではなく、ただ商代末期の王陵地と祭祀地だけだったという説を展開した。その主な理由も三つある。

（１）殷墟には城壁がなく、首都としては「想像しにくい」という。また、小屯村の西側にある溝（壕）は防御施設ではなく、ただの排水施設に過ぎない。

（２）宮城、大通り及び大規模な宮殿が発見されていないので、都の性質を備えていない。宮殿と見られる建物はただの享堂あるいは祖廟であって、宮殿ではない。

（３）「常識」として、都城と陵墓区とは一定の距離があり、同じ場所に置くはずがない。更に墓（王陵）は直接都城内に置かれるはずもない。

論文の作者はまた商代末期の王都を探すなら殷墟より南約 100 里（50 キロ）にある朝歌に目を向けるべきだと主張する。⁽¹⁸⁾

この説はそれなりの理由があり、もしこれが成り立てれば、商代の歴史はある程度、書き直さなければならないことになる。しかし前述の三つの理由は推論に過ぎず、まだ十分に殷墟が王都であるとの説を覆することができるのに達していないのが事実である。この問題の解決は（この説が成立する前提は）、恐らくまさに作者の指摘したように、朝歌での考古・調査によるのである。

前世紀の五十年代、鄭州の商城壁遺跡が発見された。ここは商代の王都であったことは間違いないだろうが、それが商のどの王の都であるかは今なお定説がない。発見された後すぐに、ここは仲丁の移した隰（囂）都だと指摘され、⁽¹⁹⁾ 大多数の学者がこの説を受け入れた。しかしその後、鄒衡はこれを否定して、鄭州商城が湯の都の亳だと主張した。彼の論拠はたいへん多いようだが（鄒衡著『夏商周考古学論文集』を参照）、学界では、それを受け入れないようである。

二里头遺跡が発見された後、ここは湯王の都である西亳だと考える学者が多い。その証拠として、『漢書』地理誌、『水経注』穀水注と汜水注、『括地誌』などにある記載が挙げられている。また、ここは桀の都である斟尋だという説もある。しかしこの説はあまり受け入れられていないようである。原因は簡単で

ある。「二里头文化」の全部四期は一体夏（王朝）に属すかそれとも商王朝に属すかは未解決の問題で、激しく論議されているため、西亳説と斟尋説のいずれも説得力がない。

その後、二里头よりあまり離れていない尸郷溝商城遺跡が発見され、『漢書』地理志、『水経注』穀水注と汜水注、『括地誌』などにある記載は、ここが湯の都の西亳だと証明する証拠になった。それに加えて、『太康地誌』、『洛陽伽藍記』、『元和郡県誌』などの史料も引用されている。それ以外に、現地の地名はちょうど『漢書』地理志にある「尸郷、殷湯の都だ」との記載に合っており、更に、「尸郷」という名の一本の溝がまっすぐに城壁遺跡を横切っていることもある。地元では、商の湯王、西亳、尸郷などに関する多くの伝説が庶民の中で広く伝わっている。それに加えて、杏園村の南に伊尹墓、田横墓（尸郷で自刎したことが史書に記載されている）があり、高庄村の隆起する地形が「亳地」と称され、ほかに「湯王墓」、「湯王廟」などの名所までもある。このように、これらすべてを一概にこじつけだと片付けることはできないようだ。このため、尸郷溝は湯王の都の亳であることは恐らく事実に合うのではないかと思う。これに対して異議を唱えるのは主に鄭州商城が湯の亳都だと極力主張する鄒衡である。彼は尸郷溝が「(商代のもう一人の王の) 太甲の桐宮だ」と主張する⁽²⁰⁾。しかし、発掘者によれば、尸郷溝商城の建設年代は鄭州商城より早く、甚だしきに至っては二里头文化の3期までに年代が上がることも有り得るという。つまり鄒衡の認めた夏（王朝）の紀年に溯ってしまうのである。その上、太甲が王になったのは湯王より四代も遅いので、両者の距離があまりにも遠すぎて、「桐宮」説は確かに説得力がないと言わざるを得ないだろう。

1999年末、河南省安陽市有名な殷墟遺跡保存区域範囲内、洹河北岸で城壁に囲まれ、年代は殷墟よりやや早い大規模な遺跡が発見された。城壁の平面はほぼ方形で、各辺の長さは2000 mぐらい、総面積が400 万㎡を超えると報告され（『考古』2003年5期によると、470 万㎡）、鄭州商城（317 万㎡）より大きく、極大規模の集落であるとも言える。また、南北長さ約500 m、東西幅

200m以上の宮殿区も発見されている。⁽²²⁾

この洹北商城も間違いなく商王朝のある王都だろう。ただし、どの王の都であるかは議論の種になっていて、盤庚の「殷」そのものか、それとも仲丁の「囂（囂）」であるか、あるいは湯の都の亳であるか、また河亶甲の都の相であるかは、盛んな議論が行われている。⁽²³⁾

もちろん結論はまだまだ先のことであるが、筆者から見れば、この洹北商城は盤庚の「殷」そのものである可能性が非常に高いと思う。理由は比較的簡単なもので、近くの洹河の南にある殷墟が発見された当初のいろんな議論（『竹書紀年』・『史記』などの記載及び王国維ら学者の論述など）は、この洹北商城に入れ替えれば、ほぼすべて当て嵌まるのではないかと考えられる。そうすると、殷墟は都ではない説や、祖廟であるか王陵であるなどの議論は「一理あり」に留まらず、充分成立できる説になるのではないかと考えられる。筆者からすれば、洹北商城と殷墟は「二ヶ所で構成する一つの集落」として、つまり王都の都市部とその郊外（洹河の南）にある王陵部という「二ヶ所で構成する都」であると受け止めるならばよいのではないかと考えられる。

四ヶ所（五ヶ所？）の大規模な城壁集落（二里頭、尸郷溝、鄭州、洹北商城・殷墟）の文献記載との関係については、おおむね、次のような数種の可能性があると思われる。

二里頭が亳であるならば、二里頭より年代の遅い尸郷溝と鄭州商城は亳より年代の遅い囂（囂）、庇、邢、耿、庵という数ヶ所の都の中の二ヶ所にあたる。尸郷溝は年代が二里頭に続くので、囂である可能性が大きいと考えられ、鄭州はその後の都の一つだろう。

尸郷溝が亳であるならば、尸郷溝より年代の早い二里頭に二つの可能性がある。もし商（族）人が建てたならば商丘か泰山下か殷（賛茅）であるはずだが、もし夏（族）人の都であるならば、二里頭は西河かそれより更に古い老丘であるか、あるいは桀の都の斟尋となる。そうすると、尸郷溝より年代の遅い鄭州

は多分囂（隲）の地だろう。

鄭州が亳であるならば、それより年代の早い二里頭は夏の都（夏墟？）の斟尋あるいは西河に当たる。尸郷溝は商文化に属するのは確実であるので、こんどは湯の前の商丘に当たるか、それとも殷（この殷は小屯村と違うが）に当たるだろう。しかし、もし鄭州を亳として認め、尸郷溝が太甲の桐宮であると位置付けるならば、地層（年代）上の証明は必要になる。つまり、尸郷溝は鄭州より遅い証拠が必要である。

もし洹北商城・殷墟は盤庚が移してきた亳の地であるならば、それより年代の古い数ヶ所の城壁遺跡とは関わりがなくなる。盤庚の「遷殷」する前の数回の移動に関する状況を把握するために、これからの新しい考古発見に注目する必要がある。

洹北商城・殷墟は武丁が移った都であるならば、武丁の前が新しい疑問になる。おそらく彭金章・曉田の論文に盤庚が亳の地、つまり尸郷溝商城へ移ったと書かれたように簡単ではないだろう。⁽²⁴⁾

これらの複数の可能性の中、はたしてどれが歴史の事実に合うのかは、湯王の都、亳の所在地が確認されることによって、はじめて判明されることになるだろう。

結 語

文献所見の夏・商（殷）二つ王朝の「都」は全部で28ヶ所（場所）がある。これらの記載されている王都が、黄河流域で発見されている幾つかのこの時期の大規模な集落遺跡には、比定できるものがいくつか入っているに違いないだろうが、確実に比定できるものが今の段階ではまだないと言わざるを得ない。これらの大規模な集落遺跡の中に、ほぼ間違いなく比定できる場所は洹河兩岸にまたがる洹北商城と殷墟で、この二つの遺跡で構成するのは商（殷）王朝最後の都の殷（北蒙）であるのではないかと考えられる。すなわち、洹河北側にある城壁で囲まれるのは王都（都市部）であり、洹河南側にある殷墟は商（殷）

王室の陵墓部であると考えられる。

注釈：

(1) 方詩銘・王修齡：『古本竹書紀年輯証』，上海古籍出版社 1981 年。

(2) 傅築夫：「關於殷人不常其邑的一個經濟解釈」，『文史雜誌』1944 年 4 卷 5 - 6 号。

芳明：「殷商為何屢遷都」，『歷史教学』1956 年 6 期。

(3) 拙著『黃河流域集落論稿』第四章・第八章を参照，知識出版社 1999 年 12 月。

(4)・(17)・(24) 彭金章・曉田：「殷墟為武丁以來殷之舊都説」，中國考古學會第 5 回大會發表論文，1985 年 3 月，北京。

(5) 秦文生：「殷墟非殷都考」，『鄭州大學學報』1985 年 1 期。

楊錫璋：「安陽殷墟西北崗大墓的分期及有關問題」，『中原文物』1983 年 3 期。

(6) 鄒衡：『夏商周考古學論文集』，文物出版社 1980 年。

(7) 譚其驤：「西漢以前黃河下游河道」，『歷史地理』創刊号，上海人民出版社 1981 年。

(8) 中國社會科學院考古研究所二里頭工作隊：「河南偃師二里頭早商宮殿遺址發掘簡報」，『考古』1974 年 4 期。

中國社會科學院考古研究所二里頭工作隊：「河南偃師市二里頭遺址中心區的考古新發現」，『考古』2005 年第 7 期。

「學者專家齊聚偃師研討『華夏第一王都』」，『中國文物報』2005 年 10 月 21 日。

(9) 河南省博物館等：「鄭州商代城址試掘簡報」，『文物』1977 年 1 期。

河南省博物館等：「鄭州商城發掘報告」，『文物資料叢刊』第 1 輯，文物出版社 1977 年。

河南省文物考古研究所編著：『鄭州商城：1953 - 1985 年考古發掘報告』，文物出版社 2001 年。

(10) 中國社會科學院考古研究所洛陽漢魏故城隊：「偃師商城的初步勘探和發掘」，『考古』1984 年 6 期。

中国社会科学院考古研究所河南二隊：「1983 年秋季河南偃師商城發掘簡報」，『考古』1984 年 10 期

- (11)・(22) 唐際根・劉忠伏：「安陽殷墟保護區外緣發現大型商代城址」，『中国文物報』2000 年 14 期。

中国社会科学院考古研究所安陽工作队：「河南安陽市洹北商城的勘察與試掘」，『考古』2003 年第 5 期。

- (12) 殷墟『殷墟發掘報告第一期』，中央研究院歷史語言研究所 1929 年。

胡厚宣：『殷墟發掘』，學習生活出版社 1955 年。

中国社会科学院考古研究所安陽發掘隊：「1958-1959 年殷墟發掘簡報」，『考古』1961 年 2 期。

中国社会科学院考古研究所安陽發掘隊：「1975 年安陽殷墟的新發現」，『考古』1976 年 4 期。

- (13)・(20) 鄒衡：「偃師商城為太甲桐宮說」，『北京大学學報』1984 年 3 期。

- (14) 王国維：『觀堂集林』卷 12「說殷」。

- (15) 丁山：『商周史料考証』第 P・37，竜門聯合書局 1960 年。

- (16) 楊錫璋：「安陽殷墟西北崗大墓的分期及有關問題」，『中原文物』1983 年 3 期。

- (18) 秦文生：「殷墟非殷都考」，『鄭州大學學報』1985 年 1 期。

- (19) 安金槐：「試驗鄭州商代遺跡——隤都」，『文物』1961 年 4-5 期。

- (21) 中国社会科学院考古研究所河南二隊：「偃師尸鄉溝商代早期城址」，中国考古学会第 5 回大会論文，1985 年 3 月，北京。

- (23) 唐際根・徐広徳：「洹北花園庄遺址與盤庚遷殷問題」，『中国文物報』1999 年 4 月 14 日。

楊錫璋・徐広徳・高炜：「盤庚遷殷地点蠡測」，『中原文物』2000 年第 1 期。

文雨：「洹北花園庄遺址與河亶甲居相」，『中国文物報』，1998 年 11 月 25 日。

唐際根・劉忠伏：「安陽殷墟保護區外緣發現大型商代城址」，『中国文物報』2000 年 14 期。